社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法：アジア諸語版
－日本語版作成の試み－

Intercultural Communication with Special Consideration of the Socio-cultural Diversity of Asian Languages
–A Trial Version for the Japanese language–

藤森 弘子
Hiroko Fujimori

東京外国語大学大学院国際日本学研究院
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨:欧州で誕生した外国語教育参照枠「CEFR」は世界の外国語教育に影響を与えている。アジア地域では西洋の社会文化とは異なった社会・文化的特質がみられる。例えば、買い物場面の交渉や相手に応じた挨拶表現の使い分けなどは多様で複雑であり、CEFR の枠組みだけでは十分とは言えない。そこで、本稿では社会・文化的適切性の面から日本語特有の社会・文化的要素を抽出し、その特徴を記述し、「日本語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目」試案を作成した。

Abstract: The creation of the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) has had an influence on foreign-language teaching worldwide. It should be noted however that the society and culture of Asia is markedly different from that of the West. Purchasing something, for example, can involve negotiations and linguistic forms which are both diverse and complex, and to which the traditional CEFR cannot easily be applied.

With this in mind, I have selected socio-cultural elements unique to the Japanese language, and through a description of them developed a proposal for a framework of items for assessing social-cultural adaptation and ability of learners of Japanese.

キーワード: ヨーロッパ言語共通参照枠、社会・文化的適切性、日本語特有の社会・文化的要素、参照レベル記述

Keywords: Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR), Socio-cultural Appropriateness, Social and Cultural elements specific to Japanese Language, Reference Level Descriptions

1. はじめに

CEFR[1]が誕生して以来、世界の外国語教育に様々な影響を与えているが（投野 2013、浜津 2014、ソ・アルム 2014 など）、日本語教育においてはパラダイムシフトと呼ばれるほど、言語教育観の変化が顕著になった。例えば、日本語を母語としない人たちのための能力評価認定試験である「日本語能力試験[2]」は国内外において 1984 年より開始され、当初は知識量を測るような試験問題であったが、2010 年からは英語教育の大規模試験と同様、言語運用能力を反映しているかどうかの検証を経て、N1 から N5 まで 5 段階の新しい能力評価の試験になった。特徴としては、各々のレベルの合格者が日本語でどのような

[1] Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching and assessment の略。邦訳は「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（吉島他 2004）」
[2] https://www.jlpt.jp/about/index.html 参照。

ことができるのかを示した「日本語能力試験 Can-do 自己評価リスト」というのが参照用に明示されており、当該言語を用いて何ができるのかといった CEFR の外国語能力評価と共通している。

また、日本の外国語教育の中で最も早く CEFR の影響を大きく受けたのは、英語教育であろう。投野（2013）は CEFR のディスクリプタの妥当性の検証法を参照し、日本の英語教育独自の参照レベル枠を策定し、妥当性の検証を行っている。同様に、日本語教育においても藤森他（2017）では大学機関で学ぶ際に必要とされる日本語能力を「アカデミック日本語」と定義し、「アカデミック日本語 Can-do リスト」の試作版を、①学習者の自己評価、②日本語教員による並べ替え調査、③学習者の産出物によるモデル化抽出の 3 点から、Can-do 記述文の妥当性の検証を行い、2017 年 3 月より「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト（AJ Can-do リスト）」がウェブ上で公開[3]されている。

このように、その言語を使って何ができるかという指標ができ、言語能力が可視化されるという利点はあるものの、CEFR の記述文をみても非常に抽象的で、いつ、だれに、どのようにその行為を行っているかといった具体な項目が見えにくい。CEFR が世界的拡大傾向にある現在、非 EU 言語地域においてどのような要素を考慮すべきか、CEFR Companion Volume 邦訳（富盛 2019b）を参照しつつ、とりわけアジア諸語圏での人間関係が反映された言語行動を社会・文化的適切性として指標化することを富盛（2019a）では提案しており、本稿ではアジア諸語の一つとして、日本語版の試案を紹介することを目的とする。

2. 文化の違いが言語コミュニケーションにどのように反映されるのか

2.1. 社会・文化的適切性の範囲

以下は日本の大学の留学生 A による日本語教師 T に対する発話である。

(1) 毎日会う教師に対して、
A: あ、こんにちは、先生。**お元気ですか。**
T: ええ、・・・まあ、元気ですよ。

(1)のような「お元気ですか」の挨拶語使用は、日本語では毎日会う人には使わない。また「こんにちは」は家族に対しては使わないという規範もある。このような日常の儀礼的表現や決まり文句は適切な使用法さえ身につければ、対人コミュニケーション上有益である。挨拶行為は発話を交わすこと自体が目的であり、コミュニケーション上の意味を持つ交感的言語使用の典型である。それをいつ、どのような場所・場面で、どのように言語行動をとり、話し手の意図を伝えていくかという知識、または能力がなければ円滑なコミュニケーションは望めない。

以下の(2)は英語圏の留学生 B が宿題を提出する際、(3)は先生にコーヒーを勧めるときの発話である。

(2) B: 先生、宿題が**ほしい**ですか。
(3) B: 先生、コーヒーを**のみたい**ですか。

日本語の社会文化規範では、目上の人に対して、したいかどうかを直接尋ねることは失礼になる。よって、(2)では「先生、宿題です」のような状態を同定するような名詞文にしたり、(3)では「先生、コーヒーいかがですか」のように相手に意向を問うような表現を用いるのが適当であろう。これらは、筆者が経験した、日本語の社会・文化的適切性に反した誤用である。

[3] http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/kyoten/development/ajcan-do/

以下のような、日本語の「テ形」で終わる言いさし文には多様な発話機能があるが、日本語学習者にはその習得は難しいとされる。

(4) 響子：あ、あの、その節は**お騒がせしまして・・・**
近所の奥さん：いーのよ　いーのよ！！

(5)（家庭教師先で）
母親：郁子の母でございます。このたびは**無理を申しまして**。（と頭を下げる）
五代：いえいえ、とんでもない。　（白川 1990）

白川（1990）はこれを「言いさし」の形としてとりあげ、日本語の言語行動を表す言語形式に多様な発話機能があることを分類提示している。初級レベルにおいても、誘いや依頼に対する断り表現に「～はちょっと…」という言いさし文を導入することが多い。

社会心理学の視点から中山（1985）は、日本人は依頼を断る場合や、苦情を述べたり、反対意見を述べたりする場合に「曖昧表現」をよく用いると指摘している。その深層心理は、他者への「過剰配慮」からくるという。これは日本人が対人コミュニケーションの際に互いの感情の動きに気を配り、できるだけ相手の意向に沿った形でコミュニケーションしようとする心理をいう。従って、相手の意向に沿えない発話行為においては、婉曲で曖昧な表現をとることによって相手の感情を傷つけることをできるだけ避けようとする文化規範があると言える。過剰心理はソトの人とのコミュニケーションにおいて最も強くなるとし、その背後には日本社会の均質性志向があるとしている。その原因として、日本は些細な人間関係の不一致が排除へと直結しやすい社会であるからだと指摘している。

2.2. 日本語の断り発話行為の特徴

「断り」行為は、先の中山（1985）が指摘したような、相手の意向に沿えない状況を前提としており、日本語の「相手に合わせる」という原則に反する。そのため、相手との摩擦回避や人間関係の不均衡を修復し、維持するための言語行動がとられるであろう。社会的相互作用として、円滑なコミュニケーションを行うためには、聞き手に不快感を与えないことが重要なのである。

藤森（1994）は談話完成法を用いて、親疎別・社会的地位別の場面を取り上げ、日本語母語話者（JJ）、韓国人日本語学習者（KJ）、中国人日本語学習者（CJ）に対して日本語で回答してもらい、日本語を知らない韓国語母語話者（KK）に対して、同様の場面内容が韓国語で書かれたものに韓国語で回答してもらい、日本語を知らない中国語母語話者（CC）に対して、中国語で書かれたものに中国語で回答してもらった。以下は「誘いに対する断り」の結果である。

表 1 誘いに対する断り発話の連鎖パターン

親しい相手に対して	JJ	:	{詫び}{理由}{関係維持}
	KJ	:	{詫び}{理由}{関係維持}
	CJ	:	{理由}
	KK	:	{理由}
	CC	:	{結論}
目上の相手に対して	JJ, KJ, CJ	:	{詫び}{理由}／{詫び}{感謝}の多用
	KK	:	{理由}
	CC	:	{詫び}{理由}

結果として、JJ は親疎の相手、目上に対しても「詫び」先行型をとることが判明した。KK はそれとは対照的に「理由」先行型であり、CC は｛結論｝つまり、「行かない」のような直接的な断り表現を用いていることがわかった。親しい相手に対して KJ は JJ と同じスタイルにシフトしており、目上に対しては KJ、CJ とも JJ と同様の「詫び」先行型にシフトしている。

｛関係維持｝は「今度また誘ってください」のように、今後も関係を続けたいという意向の表明であり、「共存意識」を高める効果をもたらしている。また、JJ は理由表明の際、「ちょっと用事があるので」のように曖昧型の使用が多かったことも特徴の一つである。

2.3. 母語場面から接触場面へ

2.2 の結果はある程度社会文化規範について「傾向がある」とはいえるが、それを当該文化の「典型」として一般化してよいのかといった問題が残る。つまり、母語話者同士ではこのような発話連鎖で行うのが一般的だとしても、母語話者と第二言語話者との「接触場面」で同じようにふるまうことを前提としてよいのか、それはまさしく「同化主義」「同化政策」の一部になってしまうのではないか。CEFR のように多様性を認め、複言語・複文化主義を前提とするなら、なおさら一般化ではなく「個」の表出を重視すべきなのではないかと考える。

三牧（2016）は異なる母語・社会文化的背景を持つ者同士のインターカルチュラル・コミュニケーションの重要性が増す一方である現在、母語話者同士とは異なる違和感・誤解などから人間関係構築やビジネス活動等に影響を及ぼすことを懸念している。異なる母語を持つ話者同士がコミュニケーションする「接触場面」においては母語場面と異なる振る舞いが見られることが指摘されており、例えば、フォリナートークやコミュニケーションストラテジーなどの調整行動がみられるとしている。同研究では、初対面会話に現れる話題選択スキーマを探る目的で、日中韓（[J][C][K]）母語場面データと日中韓接触場面データについて各々対照分析を行った。その結果、まず、母語場面では[J]対[C][K]という図式で自己開示とその後の相互行為に差があることが明らかになった。特に「結婚・恋人」話題は[J]では殆ど見られなかったが、[C][K]では、多く選択されていたことが挙げられる。結論として、相手言語文化との接触経験が豊富な会話参加者が、それまでに蓄積した相手文化の話題選択スキーマの知識を活用して、円滑なインターカルチュラル・コミュニケーションを志向することが分かった。このような話題管理の様相はグローバル化していく社会における異文化間コミュニケーションのあり方に示唆を与えてくれるのではないかと思われる。

2.4. 人間関係構築面からみた日本語のコミュニケーション

以下は、東京外国語大学 HP のトップページに掲載された記事[4]からの抜粋である。

> 親しさを表現するために、日本語を母語として話す人たちは、どのような言葉で、相手への近しい感情を伝え、相手との距離を縮めているのだろうか。日本語は、親しさの言葉を発達させてこなかったと『日本語は親しさを伝えられるか』の中で滝浦真人氏は述べている。敬語は江戸時代までの身分社会の中で発達し、明治以降、そして現代でもなお依然としてその価値を認められている。敬語は相手との距離を大きく取ることで、相手の領域に触れたり踏み込んだりしないという形で丁重さを表す言葉であるが、そのほかの働きがないため、使われると目立つ。そのため、話し手は、意図が相手に伝わらないのではないかという心配をする必要がなく、敬

[4] https://wp.tufs.ac.jp/tufstoday/pieria/19112901/ 参照。本学大学院国際日本学研究院大津友美准教授による「つながりと言葉」というエッセイから抜粋した。2019 年 12 月 6 日閲覧。

語さえ使っていれば礼儀知らずだと非難されることもない。しかし、その一方で、人には上手に人と仲良くなりたい、うまく友だちを作りたいという欲求もあるはずであるが、そういった親しさのコミュニケーションに関わる言葉は磨き上げられてこなかったとのことである。その結果、親しさを表現するための語彙や表現は十分でなく、人々は息苦しさを感じていると滝浦氏は述べている。かつて親しい関係にあった誰かと疎遠になったり、新しく誰かに出会い温かく親密な関係を構築することができなかったりするとき、一回一回のコミュニケーションの機会で、親しさを言葉で十分に表せていない可能性がある。コミュニケーションの場面で何が起こっているのかを明らかにすること、そうすることで言葉の研究は「つながり」とそれに関わるさまざまな問題にアプローチしていけるのではないだろうか。

筆者も 40 年近く日本語教育に携わり感じるのは、これまでの日本語初級教科書は丁寧さを優先して、親しくなるための配慮をあまりしてこなかったのではないかということである。ある日、初級クラスの学生に「日本人と友だちになりたいが、日本人は皆忙しそうで話せない」と悲しそうな顔で言われたことがある。留学生は日本に留学して友だちを作りたいのである。しかし、インプットされる日本語には敬語のルールまでを初級修了時の文法項目とされているものが多い。しかし、これではいけないと思い、つながりを作るための日本語、そのための自己発信、異文化理解を目指した初級教科書『大学の日本語 初級 ともだち』を作成するに至ったのである（東京外国語大学留学生日本語教育センター 2017）。今後、多文化共生を目指した言語教育では丁寧な日本語だけでなく、親しくなるための日本語も考慮にいれるべきであると考える。

3.「適切性」に配慮した社会・文化的コミュニケーション能力評価指標作成の試み

3.1. アジア諸語における社会・文化的コミュニケーション能力に関わる研究

田原・Nguyen（2018:12-13）はベトナム語における呼称について、相手との年齢差、性別、社会的地位に適切に対応して使い分けなければならないとしている。相手の年齢がわからないと適切な挨拶行動が行えない、外国人がベトナム語で適切な挨拶行動ができるようになるのは難しいと指摘している。CEFR の基準では「挨拶ができる」は A1 レベルとされるが、言語によってどうなのか、特にアジア諸語の社会文化的行動の特徴を鑑みて、CEFR 基準を適用できるかどうか疑問に思ったことが研究の出発点になっている（富盛 2018a,b）。

富盛・YI Yeong-il（2018a:14）では、アジア諸語において EU 言語とは特に異なると思われる社会・文化的特質の構成要素を以下のように抽出[5]している。

1）商取引の際の交渉（その土地の慣習に適した語用論的ストラテジー）
2）個人間の人間関係に相関する話題選択（年齢、住所、出身地、収入、趣味、週末の行動など）
3）社会的関係に相関して変化するレジスターの使い分け（敬語・謙譲表現、性差文体、相手に適切な称号を使うなど）
4）文体スイッチング（話し言葉と書き言葉の文体差、待遇表現を含む時候の挨拶、はがき・カードなどの文体を適切に選べるなど）

言語・文化間コミュニケーション能力の測定指標として適用可能かどうかを各アジア 8 言語[6]の教師に

[5] 1）～4）の番号は筆者が付与した。
[6] 朝鮮語、ベトナム語、マレーシア語、カンボジア語、ビルマ語、ベンガル語、ペルシア語、日本語の 8 言語である。

対してアンケート調査を行ったところ、CEFR レベルについての回答は A1～B2 の幅が見られたとしている。もう少し詳しくみてみると、1）の商取引の際の交渉については、ベンガル語、ペルシア語は A1、A2 となっているが、他の言語は B1 レベルになっているという。日本語において「店の種類や商品により、値段を訊いて、希望であれば、値引きの交渉を行うことができる」という、1）に関するディスクリプタは簡単な値引き交渉なら A2、駆け引きが必要になるような値段交渉であれば B1 レベルあたりかと思われる。

次に「社会関係が反映する文体差、待遇表現・謙遜表現」といった相手との年齢差、社会的地位に応じて待遇表現を使うことについては、どの言語も適用され、A1～B2 の範囲で示されている。4）に関する「話し言葉と書き言葉とを使い分けられる」項目についてはどの言語にも適用されている。レベルも A2 から B1 とほぼ一致している。一方、「男女差に対応した文体・語彙の使い分け」については、日本語は必須としているが、マレーシア語及びベンガル語はそのような使い分けはないと回答しており、他のアジア言語においても性差を重視する言語はあまり多くないことが判明している（富盛 2018b）。

3.2. 日本語版の試案

本節では、第二言語及び外国語としての日本語使用[7]において、社会文化的行動を構成する要素を考慮しながら、リスト化することを試みる。

表 2 日本語における社会・文化的手がかり

社会・文化的手がかり	社会・文化的手がかりを示す要素
①言語使用域の位相	公的場面か私的場面か、社会的距離（上下・親疎）、年齢差、性差、方言等
②社会的関係を表す標識	呼称：1 人称、2 人称、3 人称、ウチとソトの関係 待遇標識：敬語、ため口、授受表現、使役形、尊敬受身等
③儀礼的慣習	挨拶、感謝、再感謝、詫び、謙遜、労いなどを表す表現 例）「お世話になっております」「この間はごちそうさまでした」「ほんの気持ちばかりのものです」「まだまだです」「お疲れ様です」「ご苦労様」等
④語用論的ストラテジー	間接的発話、曖昧・緩和表現等 例 1）A:明日パーティーがあるんですが、一緒にいきませんか B:明日はちょっと… 例 2）C:お出かけですか。 D:ちょっとそこまで。
⑤会話管理・調整[8]	会話の開始・展開・終結。あいづち。相手への共感・譲歩などの修辞的用法

表 2 は、日本語における社会・文化的手がかりの要素項目案である。日本語の場合、①の公的場面か私的場面かは、「です・ます体」か「普通体」で話すかというように文体の使用がかなり異なる。目上の人には敬語を使い、親しい相手にはくだけた表現を用いるというように相手との社会的距離に応じて適切に使い分けることが求められる。しかし、年齢差により挨拶表現が大きく変わるわけではない。丁寧体で話す場合、性差は殆ど見られない。地域のコミュニティの成員として生活するまたは働く場合は、

[7] 第二言語話者の発話行為の研究として『中間言語語用論』がある（清水 2009）。
[8] 会話を調整・管理して、コミュニケーションを円滑に進めるための日本語教材も開発されている（岩田・初鹿野 2012）。

当該地域の方言のある程度の理解も必要となるであろう。②の社会的関係を表す標識については、「私、僕、俺、うち」など 1 人称の呼称にバラエティーがみられる。ビジネス場面では、「弊社」「御社」「山田部長、本日の会議にご出席なさいますか（自分の上司に尋ねる)。」「申し訳ございません。うちの山田は只今席をはずしております(得意先に対する電話での応対)。」というようにウチとソトの関係に応じて、語彙や文末形式が選択されることも日本語の特徴である。自分の行為が社会的距離の遠い相手に対して及ぶ場合、「発表させていただきます」「使わせていただきます」と使役形を使ってへりくだる言い方になる。③の儀礼的慣習表現では、ビジネスの相手先に対して「お世話になっております」、ホームステイ先等に対して「お世話になります」、相手の親切やそこから利益を得たことなどに対して、「お世話になりました」のように感謝表現にもバリエーションがある。再感謝表現について、An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies（泉子・メイナード 2009:163）では「Saying thank you for prior favors」として、先生にご馳走になって次に会ったときに「先生、この間はどうもありがとうございました」とお礼を述べるのだと記述している。日本語独特かもしれないが、人間関係が続く場合は、目上の人にご馳走になったような場合は再感謝するストラテジーも理解できることが望ましいのではないかと思われる。④は語用論的な言い回しであるが、例１）のような「～はちょっと…」で断りの表現意図を表すものは A 1 レベルでも導入している。例２）の C と D のようなやりとりは、70 年代の日本語教科書には挨拶表現として載っていたが、現在の東京のような都会では殆ど聞かれなくなったのではないかと思われる。⑤は日本語で会話を続ける際に必要なストラテジーである。あいづちは相手の話を理解している、話を続けてほしいと言ったシグナルになる。会話管理・調整能力は、限られた能力でコミュニケーションを行わなければならない第二言語話者には身につけてほしい能力である。これらの要素を踏まえて「日本語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目試案」(表 3) を作成した。原則として第二言語話者と母語話者との接触場面を想定している。その場合、リストは CEFR と同様に、産出活動、受容活動、相互行為活動、仲介活動のようにコミュニケーション言語活動を分けて記述すべきであろうか。第二言語話者は母語話者と同じようにふるまわなくてもよいと考えるためであるがこれは今後の課題としたい。

レベル別目標としては、以下のように設定した。

◆A1,A2：基本的な社会的行為：挨拶、最低限生活に必要な機能会話　＜実質的な基本行動＞ができる。

◆B1：独立した言語使用者。相手との関係を保つ、より深い異文化接触＜実質的な行動+儀礼的な行動＞が行える。

◆B2：方言・アクセントなど地域性の高いレジスターが理解できる。職場等における日本語使用の特質が理解できる。

◆C1,C2：高度なコミュニケーション（冠婚葬祭の儀礼的行為、冗談、笑い、など）能力がある。

表 3 日本語コミュニケーションにおける社会・文化的適切性のレベルと能力評価項目試案

言語行動のタスク	社会・文化的方略	CEFRレベルの目安	能力を判断する手がかり（Descriptors）	日本語の社会・文化的特質の補足的説明（Supplements）
ビジネス場面で相手が不愉快にならない行動がとれる	適切な社会的関係を保つ	C2	ビジネス場面においてウチ・ソトの社会的関係を理解し、コミュニケーションが円滑にできる	日本のビジネススタイルを理解する
文章を書く・口頭で表現する。文章や話を理解する	多様な文体・言語資源を用いて効果を上げる	C2	物事を円滑に進めるための潤滑油的表現を理解し、発することができる。	日本の社会・文化に基づく笑いのツボや言葉遊びの理解と運用。
定型表現の挨拶を使って、へりくだって相手を高める	適切な社会的関係を保つ	C2	冠婚葬祭や行事などで、定型表現の挨拶を使うことができる	「ご高配賜りますようお願い申し上げます」 「僭越ながら、一言ご挨拶申し上げます」 「ご愁傷さまでございます」
公式文書を書く	文体差で場面に最適化する	C1	公式な挨拶文や依頼文などを書くことができる。	書き言葉体特有の定型文を理解し運用できる。
俗語や慣用句などが理解できる	相手との関係を保つ	B2/C1	自分が所属するコミュニティで使われる言葉が理解できる	若者言葉や職業による慣用表現の言語理解と運用。
地域方言が理解できる	相手との関係を保つ	B2/C1	自分が所属するコミュニティで使われる方言や独特の言い回しが理解できる。	日本の地域社会に適応するための言語理解と運用。
待遇表現を用いて、ウチ・ソトの関係を示す	相手との社会的な関係を保つ	B2	相手にウチのことについて話しているのか、ソトのことについて話しているのかを伝えるための敬語が使える	・家族の呼称の使い分け（例）私の父、山田さんのお父さん ・相手に応じた待遇表現形式の適切な使用（例）「部下に持って来させます」「今度お話させていただきます」「教えてやるよ」
相手に応じて、交渉を含めた依頼・詫び・約束をするなどの適切な語や表現を使って会話が続けられる	相手との関係を保つ	B2	適切な表現で依頼・勧誘・提案することができる。相手の反応から相手の意図を把握し適切に反応することができる。	依頼の負担度に応じて、詫び表現や前置き表現を適切に使うことが重要。
不同意の表明	適切な表現で相手に不同意、共感できない気持ちを示す	B2	相手の意見や行為に対して不同意、共感できない旨を丁寧に伝えることができる	・「それはそうですが」「もっともですが」「おっしゃることはわかるんですが」などの譲歩の表現を用いて、「～んじゃないかと思うんです」など婉曲的な表現を用いて理由と共に不同意を表明する
口語・文語の文体差を使い分ける	文体差で発話場面に最適化する	B2	場面に応じて、話し言葉と書き言葉を適切に使い分けることができる。	話し言葉と書き言葉で語彙、文体などの各種要素が多岐に渡り、非常に大きく異なる。
文体差（性別）を区別する	男女の文体の違いを理解して配慮する	B1	男言葉、女言葉の違いを理解できる。	親しさのマーカーにもなる男女の文体の違いを理解できる
再感謝	以前に、相手から何らかの恩恵を受けたことについて再感謝する	B1	過去に相手から恩恵を受けたことについて再感謝できる	「この間はどうもありがとうございました」などと再感謝する
感謝表現を述べる	適切な表現で相手に感謝する	B1	相手の行為に対して丁寧に感謝できる	「これからお世話になります」（ex.ホームステイ先で）「お世話になりました」「色々連れて行ってくださって有難うございました」などが適切に使える
他者からの恩恵を受けたことを述べる	「テクレル」形式を用いて恩恵・感謝を表す	B1	他者からの恩恵行為に感謝する。	「先生、教えてくださって有難うございました」「～さん、教えてくれてありがとう」のように相手との社会的距離によって恩恵表現を適切に述べることができる。
謙遜する	ほめられたことについて謙遜する	B1	相手からの褒めに対して謙遜することができる。	相手にほめられたとき、「いえいえ」「まだまだです」と謙遜する
依頼をする	適切な表現で相手に受け入れてもらう	B1	相手に応じて、適切な表現で依頼することができる。	親疎の距離に応じて、丁寧体か普通体で依頼するか使い分けることができる。「よかったら今度の週末、パーティーに行きませんか」「今週末、パーティーがあるんだけど、一緒に行かない？」
談話標識を用いて会話を管理する	相手との関係を保つ	B1	相手との状況に応じて、会話の開始や展開、終結を相手に伝えることができる	・会話の開始部：あのう、すみません、など ・会話の展開・トピックの交替：ところで、じつは、それじゃ、それに、など ・会話の終結：じゃ、ではまた、など
興味、関心のあるトピックについて相づちや聞き返しなどを使って短い会話が続けられる	相手との関係を縮める、深くする	A2/B1	相づちや聞き返しを入れながら、短い会話を続けることができる	・「いい天気ですね」「昨日のパーティー、楽しかったですね」など天気、相手の様子、近況、共通の経験などを相手に伝え、短い会話を続けることができる。 ・「えぇ」「はい」「へえ」「本当」などの相づちを使って会話を促進したり、わからないときは「え？」「どういうことですか」などの聞き返し表現を用いて会話を続ける。
誘い、断りなど基本的な言語機能を実行できる	相手との関係を保つ	A2	相手を誘ったり、理由をつけて断ったりすることができる。	・「よかったら」「もしひまだったら」などを付けて丁寧に誘う。 ・断る時は、「～はちょっと…」のように言いさし表現で断るような間接的表現を使う。
情報を求める	適切な社会関係を構築する	A2	簡単な表現を用いて、相手の状況や趣味などを確認できる。	出身や現在の状況、週末の過ごし方など共通の話題を探すことにより、相手との会話の糸口を探したり、心理的な距離を縮めることができる。 ※相手の年齢や給料など直接的に聞いてはいけない）
ごく身近なことについて簡単なやりとりができる	相手との関係を保つ	A2	「です・ます体」でごく短い会話を続けることができる	・切り出しの表現「あのう」「すみません」が適切に使える ・「そうですか」とあいづちを打って、相手の発話を理解していることを表す。 ・終助詞「ね」を文末につけて相手への共感を表すことができる。
自己紹介する	適切な社会関係を構築する	A1	自分についての簡単な情報を与えたり、相手の情報を得たりすることができる	・名前、出身地、職業などについて「です・ます体」で話すことができる
基本的な挨拶をする	基本的な挨拶・自己紹介をとおして、基本的な社交関係を作る	A1	基本的な挨拶・自己紹介ができる	・おじぎをしながら挨拶できる。 ・「～さん」「～先生」など呼称をつけて呼ぶことができる。 ・基本的な関係維持表現の「どうぞよろしくお願いします）」を定型表現として使える。

4. おわりに

以下はCEFRが教育実践の中でどのような役割を担っているかを示した「目標」「活動」「評価」の三者関係を示した図である（奥村他 2016）。

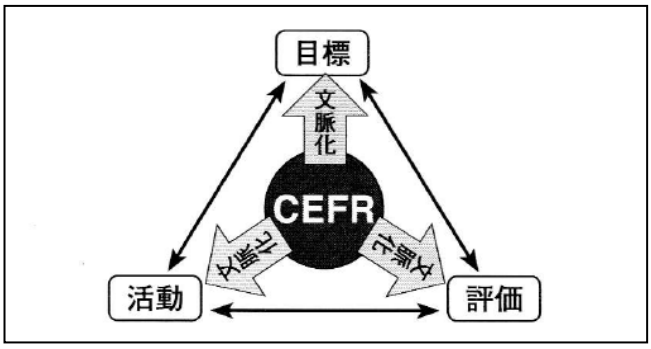

図 1 CEFR 教育実践の三角形（奥村他 2016p.79 より抜粋）

奥村（2016:12-13）は「多言語能力は言語間に相互作用がないが、複言語能力は複数の言語が相互補完的な関係にある」と述べており、複言語主義は、個人の言語活動・能力を重視していて、個人のコミュニケーション能力は学校で得る知識だけでなく、個人の経験や思考によって作り上げられていくものだとしている。日本語母語話者が大多数を占めていた日本社会も今後、少子高齢化がより進み、多様な言語社会背景を持った人々が共生する「多文化共生社会」を迎えることになると予測され、CEFRのような複言語・複文化主義の考えに基づいた「目標・活動・評価」の枠組みの構築が重要になると言えよう。川上（2019:87）は日本の外国人受け入れ政策について、個別言語をベースにした言語観ではなく、多様な背景を持つ人々が複言語複文化能力をストラテジックに利用して行うコミュニケーション方略としての「ことばの力」を育成する複言語教育の実践が必要になるであろうと指摘している。

社会・文化的特質指標アジア諸語版ができれば、一つ一つのディスクリプタに各言語の文脈化された談話テキストを作成し、適切使用の範囲を示すことにより、当該言語での社会・文化的コミュニケーション能力に関わる運用能力向上につながることに貢献できるのではないかと考える。

2019年6月に「日本語教育推進法[9]」が法案化されるに至ったが、それまで文化庁審議委員会等で日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画の面から、日本語を母語としない住民に対する施策についての審議検討が行われ、多文化共生の地域作り実現のためにボランティア任せではなく、国・地方自治体が担うべき役割、各機関の在り方等について方針が示された（伊東 2019）。これまでの日本の言語政策ではマイノリティの言語に対する言及は一切なかったが、多文化共生を目指すのであれば様々な国・地域から来た人々がお互いの言語文化を尊重し、日本社会で生活し、働ける権利の保障を言語の面からもしていかなければならない（野田 2014）。そのためにも社会・文化的適切性を考慮した指標は有用なものになるのではないだろうか。このような社会・文化的特質を考慮した補助版を作ることにより、よりアジアの言語文化間の理解が深まり、そのコミュニティの一員として互いの社会文化的行動を認め合えるような関係を構築できる一助となることを願うしだいである。

今後ますます、外国から日本に学びに来る人、働きに来る人、そして生活者として永住する人たちが増えてくるであろうことを考えると、「仲介者」として両方の言語文化を理解し、運用できる高度なコミュニケーション能力を備えた人材が増えて活躍されることを期待してやまない。

参考文献

伊東祐郎（2019）「日本語と日本社会をめぐる言語政策・言語計画－言語政策から日本語教育を問う」『社会言語科学』22巻第1号　社会言語科学会 pp.4-16

岩田夏穂・初鹿野阿れ（2012）『にほんご会話上手！』アスク出版

[9] http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html 参照。

奥村三菜子他（2016）『日本語教師のための CEFR』くろしお出版
川上郁雄（2019）「外国人材受け入れ」政策に日本語能力はどのように関わるのか」　『社会言語科学』pp. 77-90
清水崇文（2009）『中間言語語用論概論』スリーエーネットワーク
白川博之（1990）「「テ形」による言いさしの文について」『広島大学日本語教育学科紀要』pp.39-48
ソ・アルム（2014）「韓国の外国語教育及び外国語としての韓国語教育における CEFR 応用の現状に関する実態調査」『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究－中間報告書(2012-2013)－』平成 24-26 年度科学研究費助成事業基盤研究（B）研究プロジェクト pp.39-50
田原洋樹・Nguyen Hoang Minh(2018)「ベトナム語における呼称の扱いかた―『外国人のベトナム語能力測定枠』に即して―」『アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究－成果報告書(2015-2017)』pp.11-18
東京外国語大学留学生日本語教育センター編著（2017）『大学の日本語 初級 ともだち』Vol.1&2 東京外国語大学出版会
投野由紀夫編（2013）『英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館書店
富盛伸夫、YI Yeong-il(2018a)「アジア諸語における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題―学習者アンケート調査（2014）の分析から―」『アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究－成果報告書(2015-2017)』pp.19-36
富盛伸夫、YI Yeong-il(2018b)「TUFS 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」『アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究－成果報告書(2015-2017)』pp.37-47
富盛伸夫編著（2018c）『アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究－成果報告書(2015-2017)』平成 27-29 年度科学研究費助成事業基盤研究(B)研究プロジェクト
富盛伸夫（2019a）「CEFR2018 年版(Companion Volume)で提案された社会・文化的コミュニケーション能力の評価枠組みと、アジア諸語の言語コミュニケーションにおける『適切性』(appropriateness)について」『科研基盤研究 B「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」主催研究会』発表資料
富盛伸夫（2019b）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－新規能力記述文を付した増補分冊－』（CEFR2018 Companion Volume からの抜粋・仮訳）「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」作業用資料
中山治（1985）「「ぼかし」の構造―日本語の表現心理」『言語』14 号　大修館書店 pp.64-69
浜津大輔（2014）「CEFR の日本の外国語教育・日本語教育における応用」『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究－中間報告書(2012-2013)－』平成 24-26 年度科学研究費助成事業基盤研究（B）研究プロジェクト　pp.23-38
野田尚史（2014）「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ」『日本語教育』158 号 pp. 4-18
浜津大輔（2014）「CEFR の日本の外国語教育・日本語教育における応用」『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究―中間報告書（2012-2013）』平成 24-26 年度科学研究費助成事業基盤研究(B)研究プロジェクト pp.23-38
藤森弘子（1994）「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー －「断り」行為の場合」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集　第 1 号』pp. 1-19

藤森弘子他（2017）『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証』平成 26-28 年度科学研究費基盤研究（B）成果報告書（研究代表者：藤森弘子）

三牧陽子他（2016）「第 1 章初対面接触場面における話題管理―接触経験豊富な社会人データをもとに―」『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』くろしお出版 pp.3-20

吉島茂他（2004）『外国語教育Ⅱ　外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

Senko K. Maynard（2009）*An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies*. The Japan Times

執筆者連絡先：fujimori@tufs.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B）「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」（2018 年度―2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686）の研究成果のひとつとして公開するものである。